

てあったと記憶しています。しかし、我々はデマだ。

日本は負けることはない。とそれを信じませんでした。

本当に終戦が判ったのは九月三十日でした。アメリカの駆逐艦が日の丸と星条旗を立てて来た。着岸して、日本の将校、下士官、兵六名ぐらいが上陸し、はじめて終戦を知ったのです。

部隊は昭和二十年九月二日、降伏文書に調印して武装解除されました。戦争の間、給養低下、医療品欠乏のため、アミーバー赤痢、腸チフス、結核、デング熱、熱帯性潰瘍などで戦病死した者が、戦死傷死者より七十%も多かったと聞きます。

私たち部隊は天羽兵団長以下残務整理者を残し、中島少佐以下一八四五名が、十月二十日輸送船「長運丸」に乗りバガン出発、同月二十六日浦賀港に帰還し、十月三十日それぞれ復員をしたわけです。

兵団長等は昭和二十一年三月六日、残留邦人百四十名と共に駆逐艦「初梅」で佐世保に帰還した。と細かい数字まで防衛庁戦史資料にありました。

## ポナペ島戦記

北海道 菅野 四郎

私は昭和十七年一月十日、広島西部第六三部隊に入隊して、三ヶ月の教育後、鮮満国境の安東にある独立歩兵大隊に転属しました。そこで更に三ヶ月の一般教育、奉天の通信学校で無線教育を受け、十一月中頃卒業したのです。それから熱河省の承德へ行き、山の中へ入り、万里長城の南満側で、八路军（共産軍）と戦闘を繰り返していました。

昭和十八年九月末ぐらいまでの戦闘で何名かの戦死者を出しました。私も、その間風雨に叩かれ肺炎を起こし、意識が無くなり入院したのですが、三日目ぐらいで気が付いたらしく、一ヶ月ほどで退院、一人で原隊の安東に帰りました。

— その後は満州での勤務は何時頃までしたのですか。

その当時は既に南方では山本連合艦隊長官が戦死したり、戦雲急を告げていたので、我々の部隊は十二月一日、南方へ転戦するため、奉天の北、鉄嶺（テリリン）に集結、旅団編成で南洋第三支隊となり、十日釜山港から一路南下したのです。

途中、敵潜水艦出没の情報があつて、迂回航路をとり、十九年一月七日、トラック島に着き給油をしたのです。そこは、日本の真珠湾といわれるだけあり、軍艦や航空機も多数見え心強く思いました。

給油後出航し、一月十日早朝、無事目的地ポナペ島に上陸、コロニヤ小学校に仮宿営して、ナンボンマルという所の旧海軍兵舎に司令部が駐屯、三月初めまでは比較的平和な日々を過ごしていました。

その間、旅団長閣下の巡察に私を含め、無線兵二名、暗号班一名が同行したのですが、この島は珊瑚礁で、大干潮になると、船が海底について運航が出来なかつたりもしたのです。

「十九年ともなれば、制空、海權は連合軍の手にあり、中部太平洋の状況はどうだったのですか。」

三月に入つて何日目か、午前十時頃米軍の重爆撃機ボーイングB17の初空襲があつた。その当時は、まだ防空壕も無く、私達は兵舎から少し離れた草むらに身を伏せていた。この時は偵察飛行であろうと思つてしたが、帰りがけに数発の爆弾を投下して飛び去つていった。初めて体験する爆弾の物凄さに、私たちは度肝を抜かれる始末でした。

二日後、無線班は各部隊に四、五名づつ配属になり、私達五名はキチ地区に着いて、早速通信所に案内されて驚いた。見晴らしの良い高台の民間人の納屋だ。戸も無い、屋根も穴だらけ、建物の中から上を見れば青空が見えるので二度びっくり、機器を設置し司令部と交信を始めた。

数日後、B17・P38（双発双胴戦闘機）・グラマンと矢継ぎ早に來襲、高台にある通信所・部隊長の建物が目標にされる。時々機銃弾が数発飛び込んでくる。

通信兵は機材を置いて逃げ出すことも出来ず、一日一日、生きていくことを喜びあつたものです。「菅野今日も無事であつたなあ」といった具合だ。非番の時は

爆音と同時に壕まで走るが間にあわない。四、五十メートルの所だが、敵機がもう上空まで来て、走る者に機銃弾を浴びせてくる。至近弾が多くて生きた気持ちもない。勤務で無線機のキイを叩いている時は責任感が先だが、逃げる時は自分の命が先で、恐さが違うものです。

―中部太平洋や南東太平洋の珊瑚礁にはそれぞれの陸海軍部隊が防備していたのですが、攻撃されて玉砕した部隊・兵糧攻めで飢餓と病気で自滅した部隊もあります、どの島もどの部隊も、紙一重で全滅をまぬがれたのでしょうか。ポナペ島の食糧・弾薬の補給はどうでしたか。

その頃から食糧事情が悪くなってきた。上陸した当時は毎食米だったが、そのうち、一食は代用食（芋など）で、十日も経つと二食が代用食となり、五月にはもう米粒が無くなっていった。なにしろ、三ヵ月分の食糧より無い筈で、そのうえ補給がつかない完全孤立部隊になっているのだから。

―その時、島には何人くらい居たのですか。

ポナペ島の兵員は、資料によると、陸軍五千九百八十四名。海軍二千名、計約八千名の大世帯ですから、忽ち食糧不足になる。

そこで、遅まきながら、各部隊は芋の増産にとりかかった。だが、三ヵ月経たなければ収穫は出来ないのだ、その間各部隊は頭を痛めたらしい。私達の三好部隊は農場も小さく、特に食糧事情が悪かったようだ。毎日毎日夕ピオカの水団（すいとん）だけで、私達も見るとやせ細るのが判ってきました。

何か喰い物を見つけなければ、ということ、最初は農場に出て芋のツルとか、芋の細いのを拾って来て煮て食べる。それに雨降りにはカタツムリが多く出てくる。手当り次第に飯盒で煮て食べる。また、ガマ蛙・野ねずみを食べることもあった。夜食に食べられそうな草も煮て食べる。こんな体験の無い飽食時の今の人たちは、「それ程してまでも」と思うかも知れないが真実です。

そんな状態が続いているので、体力が落ちたせいかも知れないが、蚊に刺され、掻くとすぐ化膿するとい

った具合だ。通信兵は炊事から支給される食事だけしか無いので、何とか他の物で取るより仕方が無い。このままだと栄養失調になる。私達は食べられる物であれば、とにかく何でも食べることにした。それほど、キチ地区は事情が悪かったのです。

―食糧事情も大変でしょうが、孤立したボナベへの連合軍の攻撃は空爆だけだったのですか。

ご承知のように、太平洋諸島は玉砕が続いていましたが、五月初めのある朝十時過ぎ、その日は朝から天候が良く「定期便が多いかなあ」と同期の佐久間上等兵が笑いながら話をしていると、グラマン戦闘機が、今までの空襲と違った波状攻撃だ。次から次へと襲って来る。只事ではない。

その内、とてつもない音がする。小さな通信所が音波で揺れる。誰かが「艦砲射撃だ」と怒鳴る。平間一等兵が「機動部隊が見えるぞ」。私達は皆表へ出て海を見る。戦艦、空母、重巡洋艦もいる。その他ざっと見ても二・三〇の数だ。その時、背筋に寒いものを感じる。「いよいよ来るものが来たか」と覚悟を決めた

のです。

通信所の上を弾丸が飛び交うのか、その都度揺れる。壕に無線機を移動する暇も無い。部隊から、矢継ぎ早に長電が来る。私達三人だけ残って「キイ」を叩く、機銃弾が家の中に数発飛び込んで来る。余りの恐ろしさに逃げ出したのが本音でした。

上空からは艦載機が次から次へと襲って来る。この世とは思われない壮絶な攻撃で、生きた心地はしない。生涯忘れられない想いでした。

敵の着弾も正確で、コロニアの町も廃虚と化した。テアン高地（ボナベ島で一番高い）の山麓も無残にも焼けただれて変形する程に夕方まで砲爆撃が続く。

敵が上陸して来たらひとかたも無いだろう。何しろ、こちらの部隊はC装備（二時間も戦闘が続けば矢弾が尽きる）だから、我が部隊は満を持しているが、発砲の命令が出ない。ただ、ジョカーン島の高射砲陣地から撃っているようだが、各部隊は敵上陸の場合に備えて部署につき対処する。艦砲射撃も止まない。我々は旅団との交信を続け無我夢中でした。

そのうちに砲撃も止み、空爆も止む、海上を見た。

嵐の前の静けさか、いよいよ上陸か。「船影(フナカゲ)が見えないぞ」と怒鳴る声がある。海上にはなるほど艦隊の姿が無い、去って行った。私達のその時の気持ち、矢が弦から飛んでいったような心持ちであった。しかし、翌朝また来るといふ不安が残っていました。

私は「この通信所は危険だから壕の中へ移そう」といって、椰子の木からアンテナを外し、二〇分位で機材を設置、夜半まで旅団と交信を続けた。よく機銃弾の飛び込むオンボロ小屋の中で死守したものだ、と後で笑い合ったものです。夜遅く塩汁のスイトンを喰い、一睡も出来ず翌朝を迎える。海を見るが艦影は無く安堵する。

しかし、十時頃になると爆音がして定期便らしい。二・三〇分位で引き揚げていき、艦砲もあれで終わったのかと安堵する。そのような日が二―三日続いた。私達にとつては、長い長い恐怖の毎日で、忘れようと思っても忘れられない想い出でありました。

後日の情報では、ポナペと同時にトラック島でも機

動部隊により艦船、航空機が集結している所に空・海の攻撃があり我軍は壊滅、マーシャル諸島・マリアナは完全に退路を断たれた形となったということでした。

米軍は当初、ポナペ島を攻略の足場として本土への作戦を計画しようだが、本土から遠いために変更、サイパン島・硫黄島攻略となったとの戦後情報で知った。作戦変更が無ければ我々のポナペも玉碎の運命を辿るところ、運命の別れ途でした。二日後に湿地帯のジャングルの中に移動した。上から見えず安心だが湿度が高く、十日もするとカビが発生、私達も皮膚病に悩まされた。多分栄養失調のせいだろうか、医务室に行っても薬が無い。そのうち全員に伝染する。

六月になり、我軍の呂号潜水艦により、白米をゴム袋に入れ何トンかが入荷、各部隊に支給されたが私達は食べることも無かった。その白米はどうなってしまったのか、知る由もない。

二十年一月、私は旅団司令部に戻され、通信業務に携わるかたわら、班長から犬の訓練をしてみろとの命

令があった。通信機が故障した場合のためと、班長と二人で民間の家を廻り、よさそうな犬四、五匹を軍命令で連れてき、半年ぐらいで三キロぐらいの電報送受が出来るようになった。それでもまた交信事務に明け暮れたが、毎日敵の空襲があり、危険な日々を過ごしていました。

終戦となって、米軍に兵器・弾薬等を引き渡し、二十年十二月、米軍のフリゲート艦によって旅団司令部は復員のため集結して、十二月二十二日、日本海軍残存の駆逐艦「竹」に乗船、グアム島経由にて浦賀上陸、横須賀で復員、釧路着は奇しくも二十一年一月一日であった。ポナペ諸島周辺配備部隊歩兵一〇七連隊の人員損耗表によれば、ポナペ島の損耗二百五十九名であるとのことであります。

## 南洋トラック諸島従軍記

富山県 寺 島 武

私は寺島武です。私が初めて昭和十六年三月一日陸軍部隊へ入営しました時の家庭の状況は、

祖母（七十二） 健在 昭和十六年七月八日死亡

父 死亡 昭和四年十一月一日死亡

母（四十三） 健在

妹（十九） 一人 健在

弟（十三） 一人 健在

でありましたが、働き盛りの私が入営すると留守家族は即、生活が苦しいので、部落の人が協力してくれたが、家族とくに母は苦勞をした。私は大変心配でしたが、どうにも出来ぬもどかしさをきつく感じておりました。

昭憲皇太后の御歌に

「子らはみな戦（いくさ）の庭にいでたちて